

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：33925  
 研究種目：基盤研究(C) (一般)  
 研究期間：2014～2016  
 課題番号：26350312  
 研究課題名(和文) アジア圏の外国人日本語教師と日本人ボランティアに対する教育実践力養成プログラム  
  
 研究課題名(英文) Online Collaborative Space for Non-Native Teachers and Native Japanese Volunteers Teaching Japanese as Second Language in Asian Countries  
  
 研究代表者  
 加藤 由香里 (KATO, YUKARI)  
  
 名古屋外国語大学・外国語学部・教授  
  
 研究者番号：90376848  
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、教師の多様な日本語のレベルと経験に合わせて利用できる指導事例データベースとその活用を記録・共有するポートフォリオを開発することを目指した。WEB上のサイト(<http://lms.katoyukari.net>)を構築し、国内外で活動する日本語教師15名が自らの実践活動をティーチング・ポートフォリオ(TP)としてまとめた。一般的に、教師同士は「個人の教育実践を対象とした議論」に抵抗感を示すが、TPの作成過程で取り入れた相互メンタリングでは、経験や年齢の違いを超えて学び合いが成立する可能性が示された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to provide teachers with an online collaborative space to improve teaching and learning. A six-month study of inquiry groups revealed the following two points: moderated groups with active facilitators improved group processes and provided impressive group outcomes; and participant-driven projects were attractive for participants who had insufficient opportunities to consult with other teachers. Successive trials before and after supervisory experiences of their mentees' teaching portfolios showed the following three points: mentor teachers were able to understand mentees actual expertise based on their educational philosophy by carefully reviewing the mentees' teaching portfolios; junior mentors could determine various career paths as a Japanese language teacher through reviewing their mentees' personal history; and defining short- and long-term objectives was an effective aid for mentees to plan their research for educational improvement.

研究分野：教育工学

キーワード：ティーチング・ポートフォリオ 教師支援 日本語教育 遠隔学習 教員養成

### 1. 研究開始当初の背景

国際交流基金が3年ごとに実施している「海外日本語教育機関調査」(2012速報)によれば、日本語教育上の問題点として、教材不足(29.2%)、学習者不熱心(27.5%)、施設設備の不十分(26.7%)が上位にあげられている。

特に、学習者が倍増したアジア諸国では、初級レベルの学習を終えたばかりの教師や日本語学習経験のない英語教師が日本語の授業を行うケースも報告され、学習者の意欲を引き出す質の高い教師が不足している。このような人材不足に対応するため、日本語を学ぶ(あるいは学んだ)外国人に加えて、海外経験のあるシニア人材、若手の大学院生なども活用すべきであるとしている。しかし、外国人日本語教師と日本人ボランティアは、日本語レベルと教育経験が多様であるため、標準的な指導事例を提示するだけでは十分な効果が期待できない。むしろ、それぞれの教師が、自らの日本語能力や教授スキルに合わせて、適切な指導方法を発見し、教育実践を行った結果を振り返るといった一連のプロセスの支援が望まれる。

また、教師の成長支援のツールとして、ティーチング・ポートフォリオ(TP)が注目を集めている。現職教育や教員養成で用いられるTPは、学習指導案、児童生徒の学習記録のサンプル、教師自らの実践に関する文書やビデオ、指導者らによる評価、ならびに自己評価など「教育実践に関する多様な情報を集めたもの」とされる。

TPは、従来は紙ベースで作成されてきたが、近年は、ウェブベースのポートフォリオ(eポートフォリオ)も開発され、教師間の情報共有のツールとしての役割が期待されている。特に、2008年4月に全国19大学で設立された「教職大学院」では、インターネットを活用して情報共有を行うeポートフォリオの導入が積極的に行われ、参加者間の円滑なコミュニケーションの促進を目指している。その理由として、これらの教職大学院では、従来の大学院に比べて、教育実習やフィールドワークなどが重視されており、学校現場と研究機関などの異なる教育機関が連携して教育を行う必要があるからである。

しかし、教師同士は異なる専門性と教師文化を持つため、お互いの実践活動に対する理解や教育課程をめぐる対話が難しいことも指摘されている。eポートフォリオを用いた実践研究からも、学部学生ならびに大学院生が授業の一環として参加する場合には、比較的活発に交流が行われると報告されている。一方、現職教師である教職大学院生と大学教員、あるいは、教職大学院生間などの様々な教師間で交流を行う場合では、システム上の発言数が減少し、参加者らの満足度も低いことが改善点として指摘されている。これらの実験報告からも、eポートフォリオの操作性の問題よりも、これらのシステムを活用して、

多様な参加者による主体的な参加を促進する運用上の難しさが明らかになっている。

### 2. 研究の目的

本研究では、教師の多様な日本語のレベルと経験に合わせて容易に利用できる指導事例データベースとその活用を記録・共有するポートフォリオを開発することを目指した。これにより、海外の日本語教育に携わる外国人日本語教師と日本人ボランティアの教師としての成長を支援し、様々な組織で活動する日本語教師の数と割合を拡大することを目指した。

この目的のため、以下の2点から研究に取り組んだ。

(1)日本語能力と教育経験に応じて利用できる学習コンテンツの開発

(2)経験の異なる日本語教師が相互に学びあう電子ポートフォリオの構築

### 3. 研究の方法

本研究では、経験の浅い日本語教師が専門的な知識と技能を学ぶことができるeラーニング学習サイトを充実させ、自らの実践活動を振り返るリフレクション機能を持つeポートフォリオ(<https://lms.katoyukari.net/>)を開発した。利用者は、学習サイトを活用することにより、日本語教育に必要な知識を習得し、さらに、その知識を活用した教育実践を記録して公開することができる。本研究では、教師の多様な日本語のレベルと経験に合わせて容易に利用できる指導事例データベースとその活用を記録・共有するポートフォリオを開発することを目指した。

WEBサイト(<http://lms.katoyukari.net>)を構築し、国内外で活動する日本語教師15名がティーチング・ポートフォリオとして実践活動を記録した。参加者の多くは、海外で教える20-30代の若手教師であった。

参加者らは、2種類のシステム(学習管理システムMoodleとeポートフォリオmahara)を利用して、日本語教師のスキルアップとティーチング・ポートフォリオ(TP)の作成を行った。

スキルアップ学習コンテンツとしては、「講義に生かせるFD講座」、「ティーチング・ポートフォリオ(TP)作成法」から「日本語教師のためのビデオ編集入門」などの情報リテラシー科目まで約10コースが準備されていた。

また、TPの作成手順についてもMoodle上のコンテンツとして準備されており、参加者らは、講義課題にこたえることで、自分自身のTPを完成させることができた。さらに、参加者は、eポートフォリオmahara上に自分自身の活動にかかわるデータを集め、moodle上での議論や交流の際にエビデンスとして利用した。また、最終課題であるTPもmaharaで公開され、参加者間で共有された。

### 4. 研究成果

本研究では、参加者を国内外から募り、開発サイトを1年間にわたって利用してもらい、インタビューとアンケートから、システムの機能について検討を行った。

#### (1) 最初の6カ月(第1期)

最初の6カ月間の活動終了時に、フォーカス・グループ・インタビューと記述式のアンケートにより参加者9名からデータを収集した。記述式アンケートデータ(9名分)とインタビューの記録(5名分, 3時間)から、ネットワークを通じた教師交流に対して、(1)期待は大きかったものの、実際は意見交換を十分に行えなかったこと、(2)システム上で他の参加者に対して自発的な意見表明が難しいことが問題点として指摘された。

この実践を通じて、交流活動が可能なインターネット環境を準備したものの、十分活用されなかったこと、また、参加者間で議論を行うための人間関係が構築できなかったことが明らかになった。加えて、参加者から所属機関での情報をどの程度まで開示してよいのか、職業倫理上の線引きをどうすべきか判断に迷うという発言もあった。

一方、最終課題としたTP作成については、教師としての実践を振り返る機会となったという点は評価された。しかし、複数の参加者から、TPは作成したものの、その作成プロセスにおいて主体的に取り組みなかったという感想もあった。以上の結果から、本プロジェクトに参加している日本語教師らの「主体的な取り組み」をどう引き出すかが課題として浮かび上がった。

#### (2) ピア・メンタリングによるTP改善

後半の6カ月(第2期)も、第1期と同様にティーチング・ポートフォリオ作成と参加者間の情報交換を行った。

第2期のTP作成では、継続して参加した8名のうち6名がメンターとなり、新規作成者のTPを読んでコメントを書き込むフィードバックを行った。作成者はメンターからのコメントを参考として、初稿の修正を行い、第2稿を作成するという活動を行った。

さらに、第2期は、興味を同じくする参加者同士で少人数のサブグループを作り、自主的な情報交流活動も行った。第1期からの継続参加者が各サブグループのモデレーターとなり、グループ参加者の交流を促した。

#### (3) 第2期の活動評価

第2期の活動終了時に、記述式のアンケートを配布し、12名(継続参加者7名, 新規参加者5名)からデータを収集した。

アンケートでは、参加動機、達成目標、専門性向上のためのトレーニング、学習コンテンツ利用、オンラインでのグループ

活動、TP作成、あるいはTPメンターとしての支援活動、オンライン研修、理想の研修の8項目について質問した。

特に、TP作成ならびにメンターとしての支援活動を中心に参加者の意見として以下のようにまとめられる。

若手教師にとって、コメントを書き込みながら、詳細に他の教師のTPを読む活動は、様々な日本語教師のキャリアパスを知り、自らのキャリアも見直す機会となったという意見があった。この活動により、海外で活動する若手教師は、経験を積んだ他の日本語教師の実践が詳細に記されたTPを読むことができた。このように参加者同士でティーチング・ポートフォリオを検討しあう相互メンタリングが、「個人の教育実践を対象として議論」に対する抵抗感を軽減する可能性があることが示された。

今後も、TP作成におけるピア・メンタリングの効果をさらに検討し、オンライン上で参加者にとって互恵的な教師研修を実現する条件を明らかにしていきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

Yukari Kato(2014) Professional Development: Fostering Integrative Knowledge and Pedagogy of Japanese Language Teachers through e-Portfolio, International Journal for Educational Media and Technology, vol.8, (pp.24-40), 査読有

加藤由香里 (2014) 日本語教師の実践交流コミュニティによる専門的成長の支援, 『教育メディア研究』 第20号, 第2号 (pp. 35-44), 査読有

[学会発表](計7件)

加藤由香里 (2016) 日本語教師間の教育実践の共有化に向けて ティーチング・ポートフォリオ作成におけるピア・メンタリングの効果, 日本語教育学会秋季大会(2016年10月8日-9日, 於 ひめぎんホール), 日本語教育学会秋季大会予稿集 (pp.132-137)

Yukari KATO(2016) The Effects of Peer Mentoring Process in the development of Teacher Portfolio: Professional Development for Junior JFL Teachers, ICOME 2016, Kyoto, Japan (2016年8月18日-20日) (pp. 111-117)

Yukari KATO(2015) A Collaborative Model Using e Portfolio in Japanese Language Teacher Education, ICCE2015,China (2015年11月30-12月4日) (pp. 539-548)

Yukari KATO(2014) An Active Model for Professional Development in Japanese Language Teacher Education, 第10回国際日本語教育・日本研究シンポジウム, Hong Kong, China (2014年11月15日-16日)(p.56)

Yukari KATO(2014) A New Model for Professional Development of Japanese Language Teachers in Higher Education, ICOME 2014, Seoul, Korea (2014年8月25日-27日)(p.21)

Yukari KATO(2014) A Collaborative Teaching and Learning for Japanese Language Teachers in Higher Education, CAJLE 2014, Montreal, Canada (2014年8月20日-21日) (p.28)

守屋久美子・加藤由香里(2014)インターネットを通じた非母語話者同士の動画作成と交流活動が学習者意識に与える効果, 日本語教育学会春季大会(2014年5月31日-6月1日, 於 創価大学), 日本語教育学会春季大会予稿集 (pp.146-151)

〔図書〕(計1件)

加藤由香里(2016)「第7章7.3.4 教師の成長の支援を意図したWEBサイトの活用」, 日本教育工学会監修 中山実・鈴木克明編著『職業人教育と教育工学』(pp.151-155), ミネルヴァ書房

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.katoyukari.net/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

加藤由香里 (KATO YUKARI)  
名古屋外国語大学・外国語学部・教授  
研究者番号：90376848

(2)研究分担者

石川正敏 (ISHIKAWA MASATOSHI)  
東京成徳大学・経営学部・准教授  
研究者番号：90332973  
(H27年から連携研究者)

(2)研究分担者

中川健司 (NAKAGAWA KENJI)

横浜国立大学・国際戦略推進機構・教授  
研究者番号：20382830  
(H27年から連携研究者)